世界紀行文学全集 16

ギリシア・エジプト・アフリカ

世界紀行文学全集 16

ギリシア・エジプト・アフリカ

監修＝志賀直哉◉佐藤春夫◉川端康成◉小林秀雄◉井上靖

ほるぷ出版

世界紀行文学全集　第十六巻
ギリシア・エジプト・アフリカ

監修――志賀直哉・佐藤春夫・川端康成・小林秀雄・井上靖
発行日――昭和五四年九月一日　発行
発行所――株式会社ほるぷ出版
東京都新宿区新宿二-十九-十三　電話（〇三）三五四-七〇三一（代）
代表　中森蒔人
総発売元――株式会社ほるぷ
東京都新宿区新宿二-十九-十三　電話（〇三）三五六-六二一一（代）
製作――東京連合印刷株式会社

NDC 915.6

目

次

ギリシア

伊東忠太　希臘旅行茶話……三
浜田青陵　希臘紀行……八
田中耕太郎　ギリシア紀行……四九
矢代幸雄　ギリシアの今頃……六八
安倍能成　ギリシャの旅……七一
板垣鷹穂　ギリシャの古都を訪う日……九八
上野直昭　アクロポリス逍遙……一〇〇
本間久雄　アクロポリスにて……一〇五　ディオニソス劇場の跡……一〇七
福原麟太郎　ギリシャを憶う……一〇九　ミノアン文化……一一一
市河晴子　ギリシャ懐古……一一三
野上豊一郎　パルテノン……一一〇
今泉篤男　デルフィ紀行……一一六
大宅壯一　インフレに悩むギリシア……一一九
福田恆存　ギリシアの金……一一五
大岡昇平　ギリシャ幻想……一一六
村川堅太郎　花に埋もれた遺跡……一一八

エジプト

伊東忠太　埃及旅行茶話……一四三
永井荷風　黄昏の地中海……一四八　ポートセット……一五〇

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

寺田寅彦　ポートセイドから伊太利へ……一五三
黒板勝美　アビドスとアスワン……一五五
志賀重昂　ニール河の恩恵……一五八　ピラミッド登り……一五九　砂漠の月……一六〇
三宅克己　ポートサイドよりカイロ……一六一　カイロにて……一六三　サッカーラ見物……一六三　ルクソールとアスアン……一六五
徳富蘆花　埃及……一六七
愛子　埃及訪古記……一八八　カイロ付近……一九三
阿部次郎　テエベス・百門の都……二〇〇
木下杢太郎　運河をとおりつつ……二〇六　ナイルを溯る……二〇八　河の祭り……二一〇
牧野英一　埃及雑記……二一三
浜田青陵　エジプトの驚異……二一六
市河晴子　スエズ……二二九
東山魁夷　エジプト遊記……二三〇
久松潜一　カイロ行、ピラミッドに登る……二三一
高浜虚子　七重文化の都市……二三七　処女の木とアブ・サルガ……二四五
野上豊一郎　エジプト……二五一
野上弥生子　エジプトにて……二七七　ピラミッド……二七九
小林秀雄　ピラミッドの中……二八一
谷川徹三　新興アラブ諸国の盟主・エジプト……二八六
大宅壮一

山根　銀二　エジプト一泊旅行……二八九
村川　堅太郎　エジプトの驚異……二九四

アフリカ

志賀　重昂　阿弗利加大陸の南端……二九七　阿弗利加州の西端……二九八　カナリア島の風物……二九九
米窪　太刀雄　南阿の南端……三〇一　セント・ヘレナ……三三四
川島　理一郎　ハーレムの窓……三四一
吉江　喬松　銀葉樹（ケープ・タウン）……三四三
石川　達三　排日と金魚との関係（ダーバン）……三四六
東山　魁夷　オラン……三四七
島崎　藤村　ダアバン寄港……三四八　阿弗利加の南端……三四九　南阿事情……三五一
きだ・みのる　モロッコへの道……三五三　白い都……三五八　海に沿う町々で……三六三
大宅　壮一　物情騒然たる北アフリカ……三七六　新大陸への足がかり・西アフリカ……三八三
東畑　精一　エチオピヤ日記……三八六

岡本　一平　画と文

埃及カイロ　一四四　日本船　一五四　カイロの物売り　一七〇　新しき埃及人　一八一　ピラミッド見物　一九〇　埃及土民生活　二〇一
スエズ運河　二〇七　ナイル河　二〇九

執筆者・出典一覧……三五五
地　図　アフリカ、ギリシア、エジプト……巻末（折込）

ギリシア・エジプト・アフリカ

希臘旅行茶話

伊東　忠太

一　はしがき

希臘は御承知の通り、バルカン半島の南端に突出した小半島国で、籍は欧羅巴に在るが、実は半東洋国で、未開国の仲間を脱しない憫れむ可き国である。大陸の続きでありながら大陸から鉄道が連絡しておらないので、どうしても船でなければ此の国へは行かれない。何と不都合な話ではないか。

現今の希臘王国の版図は四千四十三方里、即ち印度の錫蘭島と同じくらいで、我が北海道よりはずっと小さい。人口は約二百五十万であるから、我が東京市や大阪市の人数よりも少い。国の財政はさなきだに困難な処へ、先年土耳其と戦って大敗した結果一億フランクの償金を取られ、通貨は三割廉い紙幣である。塩、燐寸、煙草、巻煙草の紙、石油、骨牌は政府の専売である。

希臘人は自分の国をエルラスと名づけているが、古代のヘラス人の種は今は殆ど無くなって、スラーヴ種やアルバニー種の血が混和している。それであるから、今日の希臘人に古代のような美しい容貌骨格を有しているものはない。一般に顔は長い、これは鼻と頤が長い結果である。頭髪、眉、鬚髭みな漆黒で、眼も西洋人程青くはない。皮膚の色も幾分か東洋的黄土色を帯び、或は一見東洋人と思われるものも少くない。それから此の外に下顎骨の突起した短い顔の種類もある。此の部類の奴は鼻が著しく小さく眼も小さい。此の二種の人種の外に、赤髪赤鬚で殆ど西洋人のような第三種の奴も見える。何れ今少し研究して、これ等の現象の原因を知りたいと思っている。

希臘の世界に誇る所は其の古代の芸術で、これに就いては世に定説があるから、今更私の喋喋を要しない。併し学海の深さは終に測るべからず。今日独逸は最も熱心に古代希臘の研究に従事し、続々新しい発見をする為め、学説も間断なく動揺して行く。

私は希臘にいたのが僅かに十三日で、ただ重要な数カ所に巡回しただけであるから、詳しい事情は分る筈がない、そこで、例に由って旅行中の見聞を少し述べたいと思う。

二　君府よりピレオへ

明治三十八年正月二十四日、いよいよ君府を後に見て埃及通いの汽船で出発した。散散に悪口ばかり述べた君府も、今更名残が惜しいような心地がして後髪を引かれる思い、折から大吹雪に見る見る君府は暗黒の裡に包まれ、船は遠くマルマラ海の沖に出てしまった。ダルダネルスの海峡を通過する頃は夜半過ぎになったので、其の歴史的趣味の深い景色を見る事が出来ず、翌朝九時船はレスボス島の港に着いた。

船中で面白く思ったのは、シベリア人数名の船客があった事である。或る者はトムスクの者、或るものはトボルスクの者で何れも回教信者であるが、彼等は故郷を立ち出でて鉄道でセワストポールへ出で、黒海を渡って君府に着きそれから今此の船で埃及へ行き、それから遠くアラビアのメッカへ行くのだそうだ。私の最も意外に感じたのは彼等の土耳其語を話すことであった。聞けばシベリア地方には回教信者が却多く、何れも多少土耳其語を知っているそうである。そこで彼等の人相を研究して見ると、オムスクの者は争うべからざる土耳其人種の相貌で一番よく土耳其音を出す。トボルスクの者は顔広く鼻低く、これは又別種の人間で韃靼族ではないようである。此の一行の中の一人は白髪の老人であったが、彼は其の子が今度の戦争に出て我が国の捕虜になり、今は松山（?）におると云う事を話していた。露兵の中にはシベリア人も沢山いるのであるが彼等は決して紅毛碧眼ではなくして、殆ど日本人に均しい黄面黒髪のモンゴリア人種でなければならない。

船は進んでスミルナに寄港し、それから多島海を横ぎって翌日の正午希臘のピレア（ピレオ）に着いたが、此の間君府出発から四十四時間、海上平穏、少しも風波がなかった。凡て地中海は冬期はいつも陰悪であるが、今度の航海は実

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

に不思議に穏かで、船嫌いの私にはこれ程好都合なことは無かったのである。好都合と云えば、君府出発の時、荷物の税関通過も非常な好都合であった。凡て土耳其の税関では、土耳其に関する一切の品物を差し押える。然るに私の所持品はみな土耳其に関する書籍、写真其の他種々な物品であるから、尋常なやり方では迚も通過しない。所が御承知の土耳其在住の山田寅次郎氏が丁度日本へ帰られるのでピレアまで同船したが、税関は山田氏の熟練なる手腕で一つも検査せずに通過してくれた。

ピレアは人口四万四千を有する港で、アゼンスを距ること二里半、却々繁昌な市である。税関では別に八釜敷いことはない。形式だけの検査で済ませ、旅券も調べない。市の体裁は奇妙に土耳其的である。或は土耳其の方が奇妙に希臘的であったのかも知れない。赤帽の先生達が徘徊していたり、土耳其語が大抵な所で通用したり、君府で見慣れている飲食店、飲食品が到る処に見えたりするので、どうも土耳其だか希臘だか一寸自分にも分らないくらいであった。或る店で巻煙草を買おうとしたら、丁稚が「へー何本差上げますか」と云うて四五本取り出したので、此の辺では一箱（通常丸小形約五十本入）と纏まった買手は無いものと見える。

三　アテネ府

ピレオの市を離れると、もう目の前に、アテネ府のアクロポリス（山寨）が屹として聳えている。四方絶壁の台の上に数々の古建築が半崩れて立ち並んでいる中に、一きわ目立つパルテノンは、世界第一の美建築として、二千四百年前から威風堂々あたりを払って立ったる有様、誰でもアッと歎賞しない訳には行かない。やがて、アテネの市中に入ると、流石に一国の首府だけあって、市街も清潔であり、一寸繁華であるが何処となく活気がないようである。静々と行く鉄道馬車、ブラリブラリと歩む紳士達、郊外に見える数本の煙突からフワリフワリと立ち登る淡煙、凡て春の曙の夢のようである。

パルテノン神殿

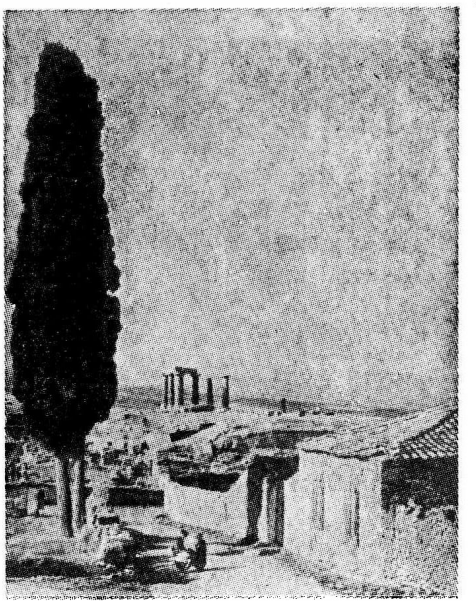
さて、此のアテネ府は、周知の如く希臘最古の王城であって、アクロポリスを繞って市街があったのであるが、今日の市街は凡てアクロポリスの北に建てられ、其の大きさは東西二十五町、南北三十町ぐらい、人口は今日のところ凡そ十三万である。流石に旧い都だけに、市の内外は名所旧跡だらけで、一々詮議して見たならば数カ月を費しても一と廻り見尽せないぐらいである。其の内で最も著しいもの丈けを、全速力で見ても、なお一週間を費さなければならない。私は大勉強で大抵著しいものは見尽した積りであるが、これを一々述べる事も出来ないから、一番著明な二三の古趾を御紹介することにする。

アクロポリスは、磊々たる巨岩から出来ている小丘の上へ、更に人工で数丈の石壁を築いて造り上げたもので、今其の上に残っている古建築が先ず四つある。其の第一はパルテノンで、此れは世界開闢以来空前絶後の美建築であると唱えられ、已にこれに就いて数万言の讃辞が費されたが今尚更に数万言が費されつつある恐ろしい代物である。これは至って簡単な純朴な社であるが、其の簡単で純朴な所に云うに言われない妙味がある。これが所謂ドーリア式の一番好い標品である。此の社の直ぐ北に隣って、エレクテオン社がある。これは所謂イオニア式の好い遺品で、玄関柱の代りに女神の立像が用いられておるので有名である。又コリント式の善美なものとしては、市中の往来の中にリジクラテスの記念碑と云うのがある。それからハドリアヌス皇帝（羅馬時代）の造った大社殿の遺跡もあるが、これはもう技術が純潔を失って仕舞っている。其の外五万人を容るべき大競技場なども驚くべき価値がある。

ここに感心な事は希臘人の学術に忠実であることで、国力不相応な立派な大学と高等工業学

校とがある。又大きな博物館もあって入場料を取らない。土耳其とは大違いである。アクロポリス以下無数の古趾を何処でも無料で随意に見ることが出来る。此の辺は大きに文明国のやり方を模倣しているのである。

近頃希臘の考古学的研究は益々盛である。殊に独逸は最も熱心で、当市に研究所を設け、デルフェルド博士が主任となって仕事をしている。博士は時々研究の結果を有志者に講義して聞かせているが、私も三回聴くことが出来た。其の研究の仕方は矢張り種々な古文書から考証を求め実地の有様と対照して判断を下すので、別に新奇な方法では無いのであるが、ただ判断の極めて大胆なことに感心した。引証の該博で正確なことは勿論で別に不思議もない。今一つ感心すべきことは、博士等の学問に忠実なことである。実に白髪になる迄脇目も振らず研究に一身を委ねているのであるから、長足の進歩をするのも無理はない。私は時々面談したが、先生は終に一度も戦争の噂を口に出さなかった。実際は戦争がどんな工合になっているか知らないのかも知れない。智に於いて我は遠く彼に優るが、愚の点に於いては到底彼に及ばない。彼等の大成功をするのはみな其の愚なる為である。序でに一言して置くが、日本は戦争の御蔭で非常に有名になったが、それは日本人は武勇に勝れ、忠君愛国の気性に富んでいると云う点で有名になったので其の他の点に於いては日本の価値はまだ知られていないようである。一例を挙げて見れば最近の欧人の著述に就いて見ても、日本の芸術は殆ど足るものが無いと云うて思想の幼稚、意匠の浅薄、技工の拙劣などを数え立てているものもある。尤も東西の嗜好が違うから已むを得ない点もある。現に欧人の崇拝している古代希臘芸術でも、私共には一から十迄善美には見えない。中には随分非難すべき欠点も見える。何れこれは後日述べることにしよう。



コリント　アポロの社殿

四　コリント及びミケネ

コリントはアゼンス府の正西二十一里の処で、コリント湾に臨んでいる小都会である。ここは丁度コリント湾とエギナ湾とが両方から入込んだ底で、僅かに二里余の地峡になっている処を近頃開鑿して運河を通じた為に、ペロポンネスの半島は今は島になって仕舞った。古のコリント市は今の町西南約二里の所にある。千八百九十六年以来アメリカの考古学会で発掘を始めたが、今日ではまだ半分も成功していない。それでもアポロの社殿を始め、劇場、市場等がいろいろと発見された。此の古都の南には例のアクロポリスが突屹として絵の如く聳えているが実に絶景である。

私はここに二日宿泊したが、ホテルの主人は始め私を何処の者とも知らずにおった。出立の際宿帳に記名した後始めて日本人と知るや否や、大に驚いて私に罪を謝し、なぜ早く日本人だと名乗って下さらなかったかと恨を述べたのである。彼は壁に掛けてある希臘国王及び皇后の像を指して「皇后陛下は御承知の通り、露国から嫁せられたので、我々は実は本意なく思っております、露は姻戚の名の下に隠然我が国に干渉して種々の害毒を加えつつあるのです。今貴国が露を取挫いて下さるので実に雀躍に堪えません」と云って真実面に現われていた。私も「日本人で御座い」と云う大看板をかけて旅行すれば何かにつけ便宜も多いのであるが、幸か不幸か、まだそこまでは脱俗しておらないのである。

ミケネはコリントの南十一里の処で、アルゴスへはここから二里半しかない。鉄道線路の直ぐ東手の丘が即ち古跡のある所である。これは

希臘の歴史以前に属するもので、所謂ペラスジの遺物であるが、美術史上極めて趣味の深いものである。例のアクロポリスの入口に有名な獅子門がある。此の獅子の工作、意匠は私が先日小亜細亜で見て来たフリギアの古墳にあるものと寸分違わないのは、最も面白い事と思った。門内には数々の古墳だの王宮の趾だのが発掘された。さて此の一郭の石壁も芸術史上最も面白いものの一つで、石垣の初期とでも名づけようか、自然石を其の大体の形に従って不規則な多角形に切って積み上げたものである。其の外宝蔵と唱えられている一種の石室なども面白いものである。私の見物した日は非常な暴風雨で、寒気凜烈と云う有様であったから、遺憾ながら精密な調査が出来なかった。アルゴスから東南二里にチリンスと云う処がある。ここには最も美しいミケネと同式の遺跡があるのであるが、私は終に行かなかった。チリンスの南一里は即ちナウプリアと云うアルゴス湾の海港である。

五　オリンピア

オリンピアは希臘の西の海岸に程近い所で、アルフィオス川の北岸クロノスが崗の南麓にある。コリントからパトラス、ピルゴスを経て鉄道で僅かに六十二里余、古来有名な霊場で、ジュピテルの社殿を初め数々の建築が甍を並べ、祭日には種々な競技が演ぜられたものであるが、追々荒廃して近頃までは全く土中に埋没しておった。千八百七十五年独逸政府が発掘にかかり、六カ年の星霜と八十万マルクの巨資を費して、殆ど其の全部を掘り出したが、まだ却々沢山残っている。何しろ平均深さ三間、面積三万坪以上の土を注意に注意を加えつつ掘り取るのであるから容易ではない。亜細亜土耳其の古趾も多くは独逸で発掘しておるようであるが、実に学問にかけては熱心な国ではないか。日本でも大和・山城の或る部分を掘りかえして見たら、必ず面白い古趾を発見するに相違ないであろう。

古趾の話しはくだくだしくなるからこれくらいに止めるが、爰に一つ感心したのは、当地へ来遊の英米の婦人の一行である。私より一日前に米国の婦人四人連れの一行が来た。此の婦人達は何れも諸国漫遊の旅行者で埃及、土耳其辺へ行った帰りであるが、女ばかりで世界を跨にかけて歩き廻る元気は、頗る感服に堪えない。それればかりではない、彼等の眼力の鋭い事も亦感服する。オリンピアの博物館内で一人の米国婦人は私に向って一つの彫刻物を指し「これは希臘時代と書いてあるが私の考では、羅馬時代の修補であろうと思います、あなたは何と御覧になりますか」と質問した。彼の鑑定の当否は姑く措き、其の注意の周到なことには感心しなければならない。それから彼は又彫刻の破片を見ては、これは誰の像、あれは誰の像らしいなどと鑑定していた。其の癖、彼は決して考古学者でも美学者でもない。ただ古美術に対する深い嗜好をもっておるのであるが、彼等は定めて言うべからざる愉快を以て彼等の旅行を継けて行くのであろう。

六　パトラスよりブリンジシに到る

パトラスはコリント湾の入口にある港で、希臘第三の大都である。人口も四万二三千あるそうである。明治三十八年二月七日の夜此の港を発し、同九日の払暁伊太利のブリンジシへ着いたが、去年の今月今日、霹靂一声、旅順港口に露艦を粉砕した当時を追想せずにおられなかった。恨むらくは今月今日、奉天の陥落を聞くを得ないのであるが、船客の米、英、仏、伊、セルビア、土耳其等の各国人、何れも我が国に深く同情を表して呉れるので、大いに満足に思った。特に数日来の暴風雨も不思議に止んで、海面は油の如く、温く柔かな日光が拭うた様な青空にかがやく心地よさ、譬えようもなかった。

八日の正午頃、船はコルフーに着いた。御承知の通り此の島は希臘領で、アドリア海の入口にあって、土耳其領のアルバニアの大陸に接近しているので、山川の美しい事で有名になっている。島中風景の見るべきものが少くないが、私は終に上陸しなかった。午後二時半船は再び此の地を発し、アルバニアのサンタ・カランタと云う所に寄港し、又静かな海面を馳走すること九時間、九日未明にブリンジシに着いた。

七　希臘の風土

希臘の地形はよく御承知の事であるから、別に述べないが、其の気候に就いて一寸御話したい。地中海の熱水で三方を囲まれているだけに流石に温かい国で、ペロポンネスの半島では平

地に雪の降ることは無いそうである。アテネ府は北緯三十八度で、我が新潟と大抵同じ高さにも拘らず、暖炉なしで冬を越す事が出来る年もあるそうである。市の付近に高い椰子の類の茂っているのを見る程である。併し冬の気候は却却宜しくなく、毎日風か雨かが絶えない。小高い山はみな雪に包まれて仕舞い戸外の溜り水には薄氷を結ぶ。一年の平均温度は六十三度だそうだから鹿児島より少し高いくらいである。尤もスパルタから南海岸へ行くと又一段と温くなる。古代希臘の風俗画によく裸体の姿が見えるのも、全く気候の温暖な為であろう。これに反して北境アルバニア付近の山地は余程寒くなるそうである。国内橄欖が到る所に繁茂し、橄欖油は国産の最重要なものの一つになっておるので、大抵気候を察することが出来よう。

八　希臘人

今日の希臘人は既に世の文明に後れて、最早追い付く事が出来ない境遇におると私は思うのである。汽車中で希臘人が痰を床の上へ吐き散らすのは悪い癖である。又或る所で賤しげな十人ばかりの一行と乗り合せたが、彼等は何か大声で唄い始め、下車する迄唄い続けていたが余り宜しくない慣習である。それから国が小さいのと貧乏なのとで一般に度量が小さい。頗る物にコセコセする性質もある様に見受けた。併しながら概して人間は善良で温厚であるようである。外国人に対しても親切であるようだが、一般に希臘人の評判の甚だよくないのは気の毒である。尤も土耳其人に比べれば、兎に角一歩も二歩も進んでおるには相違ない。彼等が二千年前にもっていた芸術はみな忘れられたように見える。彼等は今日美しい絵画も彫刻も製作することが出来ない。美しい建物も造る事が出来ない。しかし古代の遺品を模範として兎に角勉強しておるから、新機軸は出せなくとも精粕だけは嘗めて行けるであろう。

九　通貨に関する注意

旅行中一番面倒臭くて困るのは各国通貨の違うことであるが、希臘で私が一つ失敗したことを御話して御参考に供しよう。希臘では貨幣の単位がドラクムで、丁度仏国のフランと同じ価格である。然るに実際に通用しているのは皆紙幣で、紙幣の一ドラクムは、金貨のフランの七割七分に当る。それだから、物の価を定めるときには必ず紙幣の何ドラクム、正貨の何ドラクム（フラン）と区別して話をしなければならない。これは何も六カ敷いことではないが、爰に困ることは、或る所では紙幣の一ドラクムを正貨の八割と勘定し、或る所では七割一分と勘定する、これを知らないと大きに損をする。それから私は希臘出発の際パトラスで持合せの金を伊太利貨に両替した。其の時、御承知の旅行周旋屋のトーマス・クックの店で、伊太利では実際仏貨が通用すると云って、みな仏貨に換えて呉れたが、伊太利へ来て見ると、ホテル等の外では一切仏貨が通用しない。それのみならずクックの店で多分の西班牙貨を混ぜてよこしたが、これは三割も価格が低いものである。其の外、今日通用しない古い銀貨もあったので大きに損をした。クックの店でもこんな不都合があるから余程注意しなければならない。

（明治三十八年一月―二月）

希臘紀行

浜田　青陵

羅馬から雅典へ

一　発　程

仏蘭西から伊太利へ這入って来る頃、セイス先生をはじめニスの友達は、君等が羅馬へ着く時分には、宣戦の騒ぎで大変だろうと心配して呉れられたが、羅馬へ来て見れば当分そんな気配も無い。戦争は「何れ其の内」々々と遷延している間に、伊太利は却って独塊の味方となるだろうと云う風説さえ聞える。さて又た希臘の方でも、同じく「何れ其の内」主義で、六月の総選挙が済めば愈々やるであろうとの事。孰れも「だろう」付の「其の内」で埒のあかぬこと夥しい。此の曠日弥久の間に、宜しく単刀直入的に希臘旅行を遂行す可しと、市河君と相談一決したが、留守中に伊太利が戦争に這入り、希臘も尻馬について同様のことにでもならば、近海の交通は絶えてアレクサンドリヤにでも逃げ延びる外は無かろうとの心配はあるが、何分男一匹鞄一個の旅の身の上なれば、命さえ別条なければ、少々の危険は却って面白かろうと臍を決めて、大正四年（千九百十五年）五月六日の早朝いよいよ羅馬を出発することにした。

ベネベントにトラヤン帝の凱旋門を車窓から遠望して、驟雨雷鳴を追いかけながらフォジヤに近づくと、アドリヤの海が眼下に豁けて、我等は裏伊太利の人となる。夕暮七時頃ようようバーリに着く。実は希臘行の船はブリンジシから出発する例であるが、時局切迫の為め、バーリから明早朝出帆するのを、今晩から船に乗込むのである。併し何時ブリンジシから発船のことに変更せられるかも知れないから、其の時は駅まで人を出して置きましょうとクック社の話であったが、其の「人」らしい影も居ないので、先ず安心して駅を出ると、二人の赤帽「希臘行ならば大勢の客、而かも今晩出帆なれば早く早く」と荷物をもぎ取る様に拉して行く。

二　マキャベリ主義

市河君と一処に空腹を耐えて一生懸命に彼等について行くと、グルグル市中を廻りくねって十数町、漸く港の一角に着く。遠く暗の中に大船の碇泊しているのが我々の乗ろうとする船で、其処までの艀舟は我々を埠頭に待っていて早速乗せてくれたが、赤帽の奴は此の小さい荷物に五法宛を強求する。癪に障ること夥しいが、船は今にも出帆すると云うので、漸く三法を与えて彼等を追い返す。艀舟はやがて大船の近くに漕ぎつけると、驚く可し、船は埠頭に繋留して、嚮きに艀舟の出た処から二町許徒歩すれば訳なく行けるのだ。チェー赤帽と船頭と示し合しての此の奸計と切歯しても及ばない。而かも船頭の爺奴自分は赤帽でないからとて荷物を船まで運びもせず、早く賃金をと怒鳴る憎らしさに、業を煮しても伊太利語では碌に物も云えない。蝙蝠傘を振り上げて武を示しても、結局金はやる外はなかった。

さて船の舷門を登ると今度は給仕長の曰く「此の切符は更に客扱所の捺印を要すれば、そこなる馬車にて市中まで御出であれ、船は明朝出帆なれば左様に御急ぎあるな」と云うも面憎し。そこで腹の虫を押えて客扱所へ行くと、一人の男は「此の切符は賃金不足なれば更に幾何を支払あれ」と云う。併し是は強硬に撃退すれば、何とかの間違で失敬と引き込む。

散々マキャベリズムに翻弄されて切歯扼腕しても後の祭で仕方がない。今更希臘行を中止する訳にも行かず、是が「可愛い子に旅」の譬のある所以と諦め、此の夜は夕食にもありつかれず、漸くビスケットを齧じって（但し菓子屋の亭主は、親切で気持よかった）、こんな狐にばかされたような珍らしい経験も、伊太利なればこそ安価で買えるのだと観念の眼を閉じ、苦笑にまぎらして船室中に横になった。

三　アドリヤの海

朝眼を覚すと船は早やバーリ港を出て、アドリヤの海に緩く動いている。船の名は「トリノ」五千余噸の新造で勿体ない程の大船である。風

は涼しく浪は静に、ブリンジシの港を遠く顧れば、軍艦が数隻黒煙を吐いている。昨夜のマキャベリ主義で馬鹿にされたのも、今は過去の歴史となって、二人で之に所謂「高等批評」を加えるのも却って面白い。船には希臘を経て露西亜へ帰る客が多数あったが、サモス島の商人の一紳士ばかり我等の話相手になって呉れた。中食は早速伊太利流のマカロニー、船足のノロイこと亦たマカロニーの如し。これは戦時なれば石炭倹約の為めとの事。蓋し伊太利はマキャベリーの国、マカロニーの国、モンテソリーの国、何れもM字を以て始まっているのが妙だと、下らぬ大真理を甲板上に発見した。

日が全く暮れてからコルフーの島に着く。美しい島山も暗に鎖されては、港の燈火に陸地の所在を知るばかり。船中に押寄せて来た絵葉書売煙草売の希臘語の騒々しいのが、唯だコルフーの印象に残っている。帰りがけに立寄る積も、伊太利が戦争に加った為め滅茶苦茶になったのは残念であった。

次の朝起き出ると、船はイオニヤ群島の間を縫っている。小泉八雲の生れたというレオカジヤの島を已に船尾にして、古えサッポーの身を投げたというカヴォ・ドウカトの岬も消えて行くと、ホメロスの詩にあるイタカの島とケフワロニヤの島は我が両舷をかすめて過ぎ去ってしまう。美しい海島の眺めは瀬戸内をも思い出さしめる。ああ我等は早くも希臘の地に近づいているのだと考えると、胸は何となく躍るよう。バイロン卿の客死したミソロンギーを左手に、船はパトラス湾に進んで、港内に碇を下したのは丁度午後三時頃であった。

四　コリント湾の海道

我等は終に夢寐にもあこがれた古えの希臘の地に最初の一歩を踏み入れたのであった。此のパトラスが希臘第三の大都会かと思うと、其の荒涼たる景色に少なからず勇気を摧かれた。艀舟の船頭の横着は、バーリで已に経験しているから左程には思わなかったが、海岸の蔗棚の蔭にある茶店に休んで珈琲を命ずると、ドロドロと黒砂糖の汁の如く、半分ばかり口にしたばかりで、早速遁げ出す外はなかった。市街から城山の方を散歩して「英国旅館」という兎に角パトラス第一流の宿屋に、心細い希臘の第一夜を明かす。此の夜市河君は散々南京虫にやられて、先ず希臘旅行の洗礼を施されたのは気の毒であった。

汽車はプラットホームも無い往来から出発してプラットホームも無い停車場を通過して行く簡単さよ。嬉しいのはコリント湾海道の美しい景色。古え希臘の昔も其の儘、海は深く山は聳え、岬を廻れば浦あり、漁舟の浜辺に捨てられた景色は、いかにも日本の海岸にも似ている。名も知らぬ草花は鉄路の沿道に咲き乱れて、春は老いて初夏の暁風の涼しさに聊か蘇る心地がした。或る駅には花嫁を送る群集が空銃を放って、其の首途を祝せば、車窓から手巾を振って嬉しい悲しい旅立に胸一杯の希臘の娘。或る駅には枇杷を籠に入れて売りに来る裸足の子供、汽車の動いているのに飛び乗り飛び降りて一向平気。彼等は汽車を少しも恐ろしいものとはしていない。それも其の筈、玩具のような小さい狭軌の汽車で、雅典とパトラスの間百四十哩ほどを九時間で走る牛歩的の速力に、而かも一日ただ数回汽笛を長鳴して走るのみであるもの。

昼頃アクロ・コリントの崔嵬たる山影と、其の下なる古いドリヤ式の列柱とを遠望して、新コリント駅に着けば、はじめてプラットホームに出会した。駅の売店で手まねと現金で以て食品を買えば、如何にも原始時代の物々交換の光景を呈したのに自ら失笑するを禁じなかった。而かも得るところはチーズと麺麭、小魚と肉片、それに松脂入りの酒、之を古新聞に包んで貰って、手づかみで食わなければならない希臘の鉄道旅行は、初心の客をして先ず意気を沮喪せしむるに十分だ。之に比すれば我が東海道線の如きは設備と取扱とが余りに贅沢すぎる。

やがて汽車はコリントの地峡を過ぎて、運河の上を渡れば、右手にエギナの湾の美しい海面が見える。駱駝の双峰にも似たるメガラの町を過ぐればはじめてアチカの山野は我が前に開け、ペンテリコンの山は叡山の如く亢立している。道を右折すれば忽然として雅典の白き市街がオリヴの木蔭に隠見し、アクロポリスの褐色の岡がパルテノンの列柱と共に藍碧の空に、思ったよりも高く聳えているのが我が視線に入った。其の瞬間の我が感想は如何なる言葉をもって現わすことが出来よう。我は車窓より頭を突出してただ恍然と眺め入るのみであった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com